

節 目

弁護士 前 田 尚 一

出典：『札幌弁護士会 会報』 平成19年4月号

今年も、アツという間に4分の1が過ぎ、新年度が始まった。私は昭和34年生まれの「亥年」で、今年も、年男のはずだった。が、元来は、干支の割当も節分までで区分するそうであり、そうすると1月生まれの私のは「戌年」で、とっくに年男は終わってしまっていたということになる。



もっとも、何事にも誤差があるので、今年あたりが、私にとっては暦の上での節目というべきであろう。そう考えると、節目に向けての準備と思えるような出来事が起きていた。

平成15年秋に突然思い立って準備を始め、11月には現在の事務所に移転した。当初は、外套を着ずにサンダル履きで銀行に行けるメリットを感じる程度であったが、これを前後して、それまで予想もしなかった体験を味わっている。

1 平成16年4月から3年限りのお約束で北大法科大学院（「ロースクール」）の実務家教員をお引き受けすることになった。

新しい事務所への引っ越しの少し前、チョイとした呑み会で、S弁護士に「同期のよしみで・・・」などと言葉巧に頼まれて、呑んだ勢いで人間が大きくなりウツカリ引き受けてしまった。

法学未修者コースの学生を1年間で民法全範囲を修得させるという企てで開設された「民事法基礎ゼミ」の1クラスを担当した。毎回、新司法試験を意識して教員らが作成した設問について学生が作成した答案、10数通を添削して、従前の枠組みでいえばゼミ形式の授業に臨む。1通の答案を添削するだけでも1時間近くかか

る上、20年前に置いてきたことを改めて教えるための予習をするわけで、ほとんど丸2日潰れる。初年度は授業が10回実施され、採点は8回だった。

しかし、法律の知識を見つめ直したり、分かりやすい説明をするために頭をひねるという作業は、良くも悪くも、経験とか“勘”ということに頼り始めていた私自身の実務的な技能や感覚を見直すよい機会になった。そして、学生の強烈なエネルギーをもろに浴び続け、このまま認知さえもできなくなり枯渇化していったであろう部分に“喝”が入ったような気がする。

2 ロースクールでの体験が、“初心に帰る”という意味で、メンタル面でリセットがかけられたが、肉体面でのオーバーホールの機会にも遭遇した。

平成17年に入って、夜中小用のために何度も目が覚めるようになった。また、昼間は耐え難い睡魔に襲われる。疲労感がとれず、万事について意欲が湧かない……といった、沈滞ムードの状態が続くようになった。当時、はらたいら氏の体験などでちょっとした話題になっていた“男の更年期”ではないかと疑いつつも、そのまま無気力に日々漫然と過ごしていた。

友人の医師が事務所の近くの病院に赴任してきたので、ついでの時に相談したところ、「更年期なんぞではなく、“睡眠時無呼吸症候群(SAS)”に違いない。」と見立てられた。直ぐに専門の医師を紹介してもらい、一泊入院しての検査の結果、友人の見立てが的中した(検査の風景については、<http://www.smaedalaw.com/ki kai.htm> 看護師さんに撮してもらったとてもおぞましい写真が掲載されています)。

早速、「シーパップ(CPAP)」という装置を貸与され、本体にホースでつながれたマスクを装着して寝るようになるや、2、3日で事態は改善し、いびきもかかないようになった。空気を送る装置なので、それなりにうるさい音があるが、いびきの爆音に比べると雲泥の差で、女房にも好感度を持って受け容れられた。

要するに、就寝しても、たびたび気道が塞がれ呼吸が止まり、無意識に長短の覚醒を繰り返し、きちんと睡眠ができていない、ということだった。夜中に目が覚めると、尿が溜まっているのは当たり前のことで、“夜中小用のために目が覚める”のではなく、“息苦しくて目が覚めて、ふと尿意に気付く”，という流れであり、実は、原因と結果が逆だったのだ。

なお、深刻な例としては、車を運転中に強い睡魔に襲われ、交通事故に至ること

もあるそうだ。私の場合、後述のように、幸いというべきか、危なくて運転どころではなく、体験せずに済んだけれど。

最近では、装着をつい怠っても大丈夫になったけれど、私の場合、根本原因の肥満を解消しなければならない。

- 3 平成17年は身体の整備不良の発覚が続いた。7月の始めに“白内障”の手術をしてもらった。少し老眼がかり始めていたが、平成16年ころ急激に、ぼやけて見えたり、だぶって見えたりするようになった。白内障は、一般的には重篤な疾病でない。生死に関わるものでもないし、通常は、失明につながるものでもない。

しかし、体験しないと決して分からない、トンデモナイ不便が起きる。信号待ちのとき車道を通して対面する人の顔も分からない。だから、挨拶を失する。法廷での裁判官の表情や、ロースクールの授業での学生の表情が読みとれない。夜、車を運転すると、例えば信号が赤の時、1つの赤色の点灯が3つに見えるうえ、それらが繋がって輪となる。「三つ巴」(みつどもえ)と呼ばれる家紋の柄のように見えるのだ。危なくてとても運転どころではない。なお、不思議なことだが、目が不自由になってくると、声まで聞きづらくなってくる。耳で聞いて認識しているつもりの情報も、実は相手の表情など視覚によって補われているのだろう。

そこで、思いつくままに我慢できない不便さを書き綴ってみようと、キーボードを叩き始めたところ、アツという間に21個も書き出された(興味のある方は、<http://www.smaedalaw.com/haku.htm>に掲載した「白内障この不便さ!!」をご覧ください。)

すぐに主治医にみてもらい、相談した結果、とっとと手術をすることになった。

現在、白内障の手術は眼内レンズを用いる方法が採られ、保険診療としての扱いの面でも、医療技術の面でも、昔に比べ格段に進歩しており、日帰り手術さえも可能となっている。20年ほど前、司法試験の論文試験が終了して間もなく、右目の下一部にシャッターがおりたように暗く見えなくなってきた。網膜剥離という病気である。今は進歩したのだろうが、当時は、眼球を引っ張り出してする面倒な手術で術後も安定のために顔の両側に3日間砂袋を置かれて絶対安静。

これに比べると、白内障の手術は、手術される側としても“屁”のようなものだ。

1眼ずつ2度の手術となるが、1度目は、手術前後の見え方を両目で比較でき、

手術した眼は全くもってクリアで、手術前の眼が、全体が茶色というか、セピア色に見えていたことがよくわかる。生まれたときのレンズそのもの（水晶体）を新しいもの（眼内レンズ）に取り替えたので、視力自体が向上した。

オーバーホールの成果は、概ね良好だ。

昨年、久しぶりに高校の同窓会に出席した。私くらいの年代になると、各自の物事の見方、行動様式において、既に成熟の段階に身を置き、あるいは置きつつある人々と、自分自身がまだまだ育ち盛りで走っているという人々とは、かなり明瞭に区分できるように思われる。

私はというと、大それた野心はもとより明確な展望があるわけではないが、とても安寧の段階になっているとは思われず、まだまだ、節目を転機と解釈し直しながら、日々、時間に追われて這いずり回っているほかない。

ともあれ、私の場合、体重を落とすと、前述のSASのこと以外にも、両手に余る位の問題が一挙に解決し、一定の目標も実現できそうである。ダイエットは、私にとって正に急務である。

目標は、外に向かって宣言すると実現するという有力説もあるので、試しに、この場を借りて一発。

今年中に、最低5キロ減量します！！

皆さんは、年明けには、ただのデブから引き締まった小デブへ変身した私に会うことができるはずです（爆）。